

第六章 大陸の経営

昭和十二年（一九三七年）七月七日、華北における蘆溝橋事件によって日華事変が始まった。当時は、広田内閣のあと短命な一内閣を経て、貴族出身の近衛文麿が、軍部勢力を抑制しうることを期待された内閣（第一次近衛内閣）を組織していた。しかし、政府の『不拡大方針』にもかかわらず、戦局は、ずるずると拡大して中国全土にひろがった。軍は、陸海軍にまたがる大本営を設置して、戦争遂行に重要な決定を一切取り仕切ることとした。そして、この年十月には、内閣直属の企画院の設置が決定され、物資総動員計画などの戦時統制経済が推進されたが、これは、大蔵省の手から大幅に財政を統合する権限を奪うものであった。

広大な中国領土を占領した日本は、あちこちで占領行政上の問題に直面していた。昭和十三年初頭から、軍部を中心に对中国政策一元化のための对中国中央機関設置論が起こったが、外務省は、軍部が占領地支配ばかりでなく、对中国外交の権限をも握ろうとするものであるとしてこれに強く反対した。紛糾を重ね、揉みに揉んだ結果、この機関は興亜院と命名され、外交を除く对中国政策の樹立、執行、在中国特殊会社の監督および各省の中国關係行政の統一保持などを管掌することとなり、昭和十三年十二月十六日に「興亜院制」が公布された。総裁には首相が、副総裁には外務、陸軍、海軍、大蔵の四相が当たった。

大平は、二度目の妊娠中の妻と長男正樹を東京・牛込の妻の実家に残し、昭和十四年六月十五日に東京駅

を發つて、單身任地にむかった。関釜連絡船で釜山に着き、京城に一泊、平壤、奉天、北京を経て、張家口についたのは六月二十日の夕刻である。

「張家口は、一口で言えば、土の都であつた。木というものは殆んど見られない土一色の田舎街であつた。日本旅館に旅装を解いたが、『えらいところに来たものだ。大蔵次官の甘言に騙されたようなものだ』と思つて、はるばる朔北の地に来たことを怨めしく思つた。それに水が乏しく、且つその水も硬度が二、三十度という礮水のようなもので、折角もつて行つたりプトンの紅茶も、全く味が違つてしまふ始末で、腹をこわすことが多かつたのには困つた」。

しかも、北京から北へ百五十キロ余り、中国と内蒙古の往来の要衝にあつた張家口の蒙疆連絡部は、他の興亜院の連絡部よりはるかに複雑な政治環境の中に置かれていた。当時、張家口には駐蒙軍司令部が置かれ、この駐蒙軍の支配下に、昭和十二年九月、まず察南自治政府が創設された。ついで軍は大同に入城してここに晋北自治政府ができ、十一月には張家口に蒙疆連合委員会が成立して、蒙疆全域の国づくり業務が本格的に開始されていた。この間、蒙疆地方の行政指導はすべて関東軍と満州国政府によつて行われた。

日本政府は関東軍と満州国政府のやり方を行きすぎと感じ、しばらくは蒙疆を華北の一部とみなして、すべての行政処理を果たそうとしたが、現地では、蒙疆は満州の一部と考えられていた。そういうところへ東京から興亜院というえたいの知れぬ日本の役所の官僚が入ってきたわけである。現地の日本人が、軍を含めて、これら新参官僚たちを白眼視したのは無理もなかつた。

大平赴任後の九月には、それまでの蒙疆連合委員会が発展的に解消して、蒙古、察南、晋北各政府が合同、蒙古連合自治政府が成立し、蒙古人の徳王がその主席となつた。しかし、「内蒙古全体の人口構成は、七、八百万人といわれるが、大部分は漢人で、蒙古人はわずかに二、三十万人にすぎなかつた。その自治政府の主席に、蒙古人の徳王を据えたこと自体が、いかにも不自然であつた」。

蒙疆の経済政策の中で重視されたのは、対支投資計画と物資動員計画であった。この地方でこの対象となるのは日蒙合併で設立された竜烟鉄鉱株式会社や大同炭鉱株式会社だったが、「この両会社の監督をめぐっての諒解事項などは、こうした内蒙の奇型的な性格を反映して随分おかしなところがあったし、その役員人事などは、東京と新京との板挟みになって、どうしてもすっきり決めることができなかった」。

この二つの会社は内地の同種の生産会社に比べて遥かに大きな生産を示していたが、これら会社の生産拡充用の設備機械、消費資財の割当ては、すべてその年の「物資動員計画」（昭和十三年一月発足）に照らして連絡部で取りまとめ、東京の興亜院本院と折衝査定し、企画院の裁定を受けねばならなかった。大平事務官は、それらの諸会社の事業内容を精密に分析して、計画を立て、興亜院本院や企画院に持ちこんだ。

こうした大平の努力の甲斐があつて、軍や現地政府も、「物資動員計画」や「投資」という線に乗った仕事は興亜院蒙疆連絡部を通さなければならぬし、また筋を通すなら東京でがんばってくれるということがわかつて、次第に大平事務官のところへ頭を下げるようになった。大平は、そのあたりを仕事の手始めとして、蒙疆経済の運営を手がけていく。

調査をしてみても、まずわかったのは、蒙疆地方が、砂漠と遊牧民、そして地下資源という一般に抱かれているイメージとはちがって、農業地帯だということである。同地方の住民の大半が漢民族であることはすでに述べたが、この人々の多くは、明代末期の大飢饉のさいに中国本土から八達嶺を越えて流れこんできたものの子孫であり、彼らが砂漠を耕作地帯に変えていったのだ。農作物は、小麦、その他の雑穀、ケシ等である。したがって、この地方の経済を論ずる場合、農業を主とした構造を考えなければならないのに、日本人は、東京ではもちろん、現地においても、そうした理解を持っていなかった。

さらに、蒙疆地方は、満州において日本が面を確保しているのと同じが、点と線しか支配していなかった。ところが、「現地の実情を知らぬ東京は、杓子定規な低物価政策の原則を固持して譲らなかつた。その結

果は、日本側の掌握している物やサービス、例えば石炭、塩、鉄道運賃、電気や電信の料金だけに低物価政策が実行され、現地人の経済圏には、一向に浸透しなかった。……そのため、現地から購入する農産物の類は、おしなべて高くついた。

そこで大平は、現地の日本語新聞『蒙疆新聞』に「蒙疆経済を裸にする」という論文を掲載して、啓蒙活動を行った。また、『朝日新聞』や『毎日新聞』の「大陸版」にも、同様の視角から対蒙政策を論じた。

占領地の不正常的な形態であるとはいえ、蒙古連合自治政府は、一応は政府であって、中央銀行券も独自のものが流通し、治安はもとより、財政、経済、物価、為替などについてもほぼ独立した運営が行われていた。日本や中国大陸各地との取引も「貿易」のかたちであり、日本には石炭と鉄を、上海や天津にはケシからつくった阿片を輸出し、その金で必要な品物を輸入するという具合であった。

それだけに、「白紙に絵を描く」ことはできなかったものの、張家口での約一年半の滞在は、大平にとって国家の「原型」というようなものを勉強するには、またとないよい機会となった。

この頃の大平は、人に対するかなりの「好き嫌い」があったようである。とりわけ占領地のように、支配、被支配が明らかかなところでは、権力を笠に着た軍人が蠶繭を買つような振舞いをする人が多いが、大平はそれに強い嫌悪の念を覚えた。しかし、「かようなことは軍人だけを責める訳にも行かない。権力の具体的表現である参謀肩章に跪坐して、事の軽重善悪をわきまえずに、軍人に追従し、或は逆にその権能を利用しようとする役人や民間人が、当の軍人に劣らない責任を負うべきであると思った」と大平は書いており、軍、官、民のいずれにも、大平の腹に据えかねる人物がかなりいたであろうことも想像できる。

赴任して数カ月うちに、大平は、次第にこの地方を理解し、それにつれて、この地の風土や人情にも馴染んでいった。

張家口に所在する蒙古政府主席の徳王とは、日本政府駐蒙代表の幹部として時折宴席を共にすることがあ

ったが、ある日、大平は徳王にその王府のある西ソニットという旗(村邑)に招待された。

「張家口から、スーパー五人乗りの小さい飛行機で、徳王さんに案内されて、その王府の客となり、羊や馬の乳で造ったお酒をご馳走になった。徳王さんと御令息が出て、随分歓待してくれたが、私は始めて、徳王さんが、酒豪であることを発見した。というのは、張家口での宴会では、徳王さんは、殆んど僅かしか酒を飲まねなかつたからである。按ずるに、少数民族の王者として絶えず生命の危険を肌身に感じさせられているので、自宅以外での深酒を慎んでいるのだと事情通は話していたが、少数民族にはわれわれが理解できない苦勞があるものだと思った」。

また、内蒙古深く、蒙古人地帯の戸口調査に出かけたこともあった。

「トラックで果てしない高原を二、三時間位の行程を行くと、小さい村落に辿りつく。途中狼がトラックを追いかけて来ることもあった。

村落に辿りつくと、車を捨てて一戸一戸包を訪れ、家族の状況や財産の状況(羊が何頭、牛が何頭、馬が何頭という風に)を調べるのであった。夜が来れば、テントを張って寝ることもあれば、蒙古人の包の賓客となることもあった。ラマ廟を訪ねては活き仏に会ったり、その祭事を見物したりもした。そして九日間草原地帯を歩いたが、十一月というのに、もう極寒の寒さであった。そして一応調査を終えて、張北から張家口に帰ったのであるが、張家口の灯がチラチラ見えかけた時は、私はまるで東京の灯が見えたように懐かしくもあり嬉しくもあった。それからというものは、不思議にも、朔北の僻地だと思った張家口が、私にとつては、一応文化の圏内にある街だと思われ、ここに勤務することを別に苦勞とも思わないようになったのである」。

大蔵省の昭和十一年組の多くは、この時期に興亜院に転出となったが、その任地は上海、青島、厦門など、「土の街」張家口よりもはるかに条件がいい都市で、一見、大平は貧乏くじをひいた形であった。大平も、最初

のうちは、『大蔵次官の甘言に騙された』と感じ、また、軍の横暴もあって、『懐々として楽しまない日』を送った。ただここで重要なのは、他の条件のいい都市の連絡部の課長は、昭和七年組、八年組などが占め、十一年組は課長補佐のポストしか得ることができなかったのに反し、彼だけが経済課長を命ぜられたことである。

大平は最悪の環境の中で、しかも全く新しい役所の新しい出先の仕事が生みだす問題を解決する責任を負わされた。蒙疆における彼の仕事は先例のないものであり、それだけに創造性が要求された。このことは結果的に彼に幸いした。淋しげな顔をして関釜連絡船に乗ったときとちがって、朔北の寒風は彼をたくましい行政官僚に成長させて行っただのである。

商工省から大平と同じ、興亜院蒙疆連絡部に向赴任して、大平と机を並べた同僚の一人は、大平が、困難な環境の中で、持ち前のねばり強さと努力とで、連絡部の業務を少しずつ軌道に乗せて行く姿に感動した。彼はこう語っている。

「私は、事務官僚としての大平さんが、駐蒙軍司令部、蒙古連合自治政府、興亜院東京本院、隣接の華北連絡部の間を、あるときは強硬に、あるときは柔軟に取り持つて、成果を挙げていく絶妙の力量に、強い感激をうけたものだった。てきぱきとしたその事務処理能力、上司に対しては諄々と所信を説き尽して自説を曲げずに筋を通すねばり強さには、ほとほと感じ入ったものである」。

同様の印象は、興亜院の華北連絡部に赴任していた人々の間にもある。

「大平さんは、東京出張の往き帰りに、必ず北京の華北連絡部に寄るわけで、その時、数人集まって状況報告をやるんだけど、われわれは、大平さんの報告が実に完熟していることに驚いたという記憶があります。ひと味ちがうどころではなく、事務官離れした、次元の違うところから物を把え、判断して、ディスプレイするというふうだった」。

なおこの間の昭和十四年十月十七日、大平家には二男裕が生まれた。

昭和十五年の夏もすぎ、任期の切れるのも間近になったが、後任がなかなか見つからなかった。一つには同僚の多くが戦争に取られて、役所の人員が減ったせいもあったが、張家口という場所の評判を聞いて、みながおそれをなし、配属を断つたという事情もあったらしい。大平が東京に出張したとき、秘書課長の山際正道に「どうしてくれるんですか」と質したところ、山際は「自分であとがまを探せば帰してやる」と言った。そこで大平は一年後輩の佐藤一郎が企画院にいるのを思いだして、食事に誘い後任を引き受けさせることに成功した。

こうした経緯の末、大平は、昭和十五年の十月、内閣から帰朝命令を受けた。蒙古から満州各地を旅行し、十月下旬、東京に帰った。新しいポストは、興亜院本院の經濟部第二課である。興亜院官制によれば、第二課は「一、北支那開発株式会社並支那振興株式会社ノ監督ニ関スル事務、二、在支企業ノ統制ニ関スル事務、三、支那ニ於ケル拓殖事業ニ関スル事務」となっていた。大平はその「一」の二つの投融资会社の監督の仕事を与えられる。

蒙疆時代に、小さくとも一つの政府の経済の切盛りを経験してきた大平は、かなり自信もつけ、また強気にもなっていたのだろう。次のような話がある。

当時、北支那開発の総裁は、大平の入省当時の上司で元蔵相の賀屋興宣だった。大きなことの好きだった賀屋総裁は、満鉄調査部のひそみになり、北支那全域の大規模な資源調査を行うことを企画し、大調査局の設置をもくろんで、その予算案を提出してきた。大平がこの予算案にきびしい査定を加えたため、賀屋は激怒し、正面衝突となったが、結局、調査局誕生のときはかなり縮減された形となっていた。

興亜院には、財務部、經濟部、文化部、技術部があったが、各部の課長以下の職員はそれぞれの専門に依じて、陸海軍はもとより各省から派遣されていた。陸軍と海軍は極端に仲が悪く縄張り争いに明け暮れ、各

省からの出向者はそのとばっちりを食って困らされたことも多かったが、ここに集まった各省出向者は、総じて出身母体の利害にこだわることなく協力の実をあげた。

当時、国鉄から出向して経済第三課にいた磯崎勲（のち国鉄総裁）は次のように語っている。

「いまの国立劇場が位置する三宅坂と半蔵門の間の準町にあった興亜院は、対支政策の現状をどうするかだけでなく、戦後の支那経営を考えていましたから、氣宇壮大な役所で、真面目で緻密な計画を立てる戦争遂行機関の企画院とはまるきり雰囲気がちがっていました。しょっちゅう支那の地図をみながら、ここで鉄をつくる、ここで農業をやるといふように漠たる東亜経営を考えていたので、日本の役所としては異例だったと思います。ですから、集めた人物もどちらかと言えば堅気でない、少し調子はずれの人が多かった」。

そういう奇合い所帯の中から、若手事務官九人による「九賢会」という集りがつくられた。そして、故郷も大学も、所属する官庁もちがうメンバーのこの集まりが、大平の行政官としての視野を拓けるのに大きく役立ったことは疑いない。またこの時の友人たちの中から、伊東正義（のち外務大臣）、佐々木義武（のち通商産業大臣）など、後年の政治的盟友も生まれることとなった。

だが、これらの人々が抱いた東亜経営の夢は、太平洋戦争の勃発とその後の推移によって、全く烏有に帰すこととなる。

ここで強調しておきたいのは、大平がこの張家口滞在一年半をふくめた興亜院在勤の二年半を通じて、きわめて中国の実情に詳しい人間になっていたということである。彼は、中国の経済や社会、風土や国民性などに直接触れると同時に、中国の産業について資源から製品、さらには貿易や消費まで広範な分野の問題を考えなければならぬ立場にあった。すなわち、大陸を経営する官僚群の一員だったのである。その大平が、結局は「敗戦」という破産宣告を受けた日本の大陸経営ぶりをどう考えていたかは、彼が戦後二十七年たった時に、日中国交回復のためにその政治生命を賭けたことを考えると、興味あるところである。

彼は、戦争の終わった八年後に、日本の事業が中国経済の基盤の充実やその経済力発展に寄与した面もあり、また日本人は英国人やフランス人に比して、はるかに「自己本位ではなかった」としながらも、次のように書いた。

「対支政策の企画や立案が、全体として、近視的であったことも付言しておかねばなるまい。それは漢民族に対する『民族政策』でなければならなかったのに、日本人の独り相撲の憾みがなかったとはいえない。又世界の大視野から、米英やソ連の思惑や期待も十分勘定に入れておかなければならなかった筈だ。この点については、わずかに外務省が若干の抵抗を試みたとは言うものの、その主張は、強さと勇気を欠いた憾みがあったといえよう。」

大東亜戦争の先駆となつた支那事變の処理は、結局、第二次世界大戦に吸収され埋没されてしまつて、その功罪を、切離して論ずることができなかったが、その底を流れる基調そのものは、大東亜戦争における失敗の素因と軌を一にしたものであつたと思う。それにしても、対支政策はわれわれ国民にとつて、高い授業料ではあつたが、又實に民族的試練であつたことは否めまい」。

大平が興亜院勤務時代に、日本はますます戦時色を強めていた。政府はもはや軍部を全く統制することができず、短命内閣が次々と交代し、再び、近衛内閣（第二次、第三次）が出現した。しかし、期待された近衛も事態を好転させることはできず、昭和十六年十月には、首相の座を東条英機陸軍大将にゆずらざるをえなかつた。

この間に日本の政党政治は衰微を続け、昭和十五年にはすべての政党が解散して、十月に発足した大政翼賛会に吸収された。

大平が昭和十六年十二月八日の太平洋戦争の開戦をむかえたのは、横浜の三溪園の隣にある二階建のわが

家であった。彼は蒙疆から帰ってきたとき、妻の実家の近くに家を借りていたが、税務署長の頃に住んでいた横浜が懐かしく、間もなくこの地に自宅を構えて、妻と長男正樹、二男裕と一家四人で住み、そこから興亜院へ通勤していたのである。

開戦後間もない十二月三十日、夫人志げ子は長女芳子を出産した。戸籍上は翌年一月二日生まれとして届けられた。